

国語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、18ページにわたって印刷してあります。
- 2 受検番号を、解答用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 3 答えは、全て解答用紙の決められた欄に記入しなさい。下書きは、問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 答えは、特別の指示のあるもののほかは、各問の「ア・イ・ウ・エ」のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、答えの欄に、その記号を記入しなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、** **や** **。** **や** **「**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 5 記号を書くときも、文字を書くときも、明確に書きなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを記入しなさい。
- 7 提出するのは、解答用紙だけです。

1 次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書きなさい。

- (1) 白熱した試合を固唾を飲んで見守る。
- (2) 卒業する先輩に別れの言葉を手向ける。
- (3) 資金が乏しいので計画を変更した。
- (4) 長年のライバルと雌雄を決する時が来た。

2 次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書きなさい。

- (1) 遠く離れた故郷にいるテイマイのことを気にかける。
- (2) 古くからの職人技がレンメンと受け継がれる。
- (3) よくこえた大地が目の前に広がっている。
- (4) 過大なフカでモーターを壊してしまった。

3 次の各問に答えなさい。

〔問1〕ある漢和辞典で「端」という漢字を引くと、次の□の中のどのような意味と用例が出ている。②の意味に該当する熟語はどれか。

- | | | | |
|---------|----------------|-----------|----------------|
| ①はし「先端」 | ②ものごとのはじめり「発端」 | ③ことから「万端」 | ④きちんとして正しい「端正」 |
| ⑤へり「道端」 | ⑥はんぱ「端数」 | | |

ア 極端

イ 端的

ウ 端緒

エ 端末

〔問2〕 次の□の中の漢字を用いて四組の四字熟語を作るとき、使用しない漢字を書きなさい。ただし、それぞれの漢字は一度しか用いないものとする。

面	背	雷	針	付	変	差	大	腹	棒	化	同	和	千	万	従	小
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

〔問3〕 次の各文の――を付けた部分に同じ漢字を用いるのはどれか。

ア 水の供給をたたないように工事を進める。

桜の名所を訪れる観光客が後をたたない。

イ ようやく結婚式の準備がととのつた。

ととのつた文章でとても読みやすい。

ウ 本が売れたのは時流にのつた結果だ。

新聞にのつたほどの大事件であった。

エ 法のもとの平等の実現を目指す。

同じ条件のもとで実験を続ける。

〔問4〕 次の各文の――を付けた語句がものの数え方として適切なのはどれか。

ア 我が家に伝わる年代物の椅子が一足壊れた。

イ 落としてしまったので箸をもう一膳ください。

ウ 一杯のイカが水槽の中を自由に泳ぎ回っている。

エ 新年を迎えた気持ちを一句の短歌に表した。

〔問5〕 次の□の中の「聞く」と「うかがう」の関係と同じ関係の組み合わせはどれか。

聞く	―	うかがう
----	---	------

ア 会う ― お目にかかる

イ 見る ― ご覧になる

ウ 言う | おっしやる
エ 食べる | 召し上がる

〔問6〕

後の の中の文章は鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』の一節で、本文の左脇には適宜現代語訳を付してある。本文中に腰をうち折られにけりとあるが、「腰をうち折られ」たのは、次のうちではどれか。

- ア 六十ばかりの女
イ 雀
ウ 童部
エ 烏

今は昔、春つかた、日うららかなりに、六十ばかりの女のありけるが、虫打ち取りてゐたりけるに、庭に雀の

春の頃 日が明るく穏やかな折りに

しありきけるを、童部石を取りて打ちたれば、当りて腰をうち折られにけり。羽をふためかして惑ふ程に、跳ね回っていたのを 子どもが

バタバタさせて

烏のかけりありきければ、「あな心憂。烏取りてん」とて、この女急ぎ取りて、息しかけなどして物食はず。

飛んできたので

「ああかわいそうに。烏が取ってしまうだろう」

息を吹きかけたりして

小桶に入れて夜はをさむ。明くれば米食はせ、銅、葉にこそげて食はせなどすれば、子ども孫など、

夜はそつとしておいた。

銅を葉として削って

「あはれ、女刀自は老いて雀飼はるる」とて憎み笑ふ。

「なんと、おばあさんは

あざけり笑った

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

中学一年生の武井岳は、クラスメイトで幼なじみの金田晴美（キンタとも呼ばれている）に対して、先週、歌が下手だとい口走り泣かせてしまった。

週明け、岳は部活の朝練に向かった。まだ痛みが残っていたので、普通の練習は見学するつもりだったが、ひとりでシュートを打つくらいなら出来るかと思った。

本当は安静にした方がよいのかも知れない。でも、部活を休んでいるあいだに、涼方に抜かされるわけにはいかない。絶対に嫌だ。今日も朝練の開始時間のずいぶん前に、体育館に入った。誰もいない体育館はしんとして、バスケットシューズが立てる、キュツキュツという足音さえ、天井に立ち上っていく。

ゴールの前に身構える。ゴールを見据えて打とうとした瞬間、白いバックボードに晴美の顔が現われた。急に力が抜けて、中途半端になつてしまったシュートは、ゴールまで届かずにバウンドしていった。ボールがバウンドしていく音が、胸にずんずんと響いた。

あれからずっとこうだった。

あの晴美の涙が、何度も何度もフラッシュバックしてきて、どんなに払おうとしても、気づくと晴美のことを考えていた。朝露に濡れたうぶ毛の生えた葉っぱに、一粒の大きなしずくがきらりと光っているようだった。

くそつ。切り替える。

今はバスケの練習をしているんだぞ。

(2) 自分で自分を鼓舞する。

そのあと、十発打つたが、一発もシュートを決められなかった。こんなことは初めてだった。

サポーターをした右膝をのぞき込んだ。こないだ隼人と公園でシュートしたときは、なんの違和感もなかったのに、今日は少しおかしい。

そつと曲げたり伸ばしたりしてみる。やはり、痛みがある。岳はゆっくりとその場に腰を下ろした。体育館の床はひんやりとしていて、尻から背筋の方に冷たさが伝っていった。

両膝に顔を埋めると、ハッカミたいな湿布しつぷの匂いが鼻をスースーさせた。もう一度顔を上げる。バスケットゴールを見上げた。先輩たちにまぎって、涼方が放った見事なシュートがよみがえった。

なんであいつのプレーは、あんなにスマートなんだろう。

認めたくはないが、涼万のことを羨ましいと思ってる自分がいた。

どうしてなんだ、あいつはたいして努力もしていないのに……。

今はまだ、かろうじて力は拮抗きっこうしている。でも、もし、涼万が本気でやり始めたら、いつかうんと差をつけられてしまうのでは……。

ため息を長く静かに吐いた。息を吐いても、胸はちつとも軽くならなかった。

しばらくぼんやりしていると、体育館の脇を何人かの生徒が話しながら歩いている声が聞こえた。合唱の朝練に行く生徒たちだろうか。だとすると、間もなくバスケット部員もやって来る時間だ。岳はのっそり立ち上がった。

やがてバスケット部の朝練が始まり、岳は壁にもたれて見学していた。先輩たちのプレーを目で追いながらも、気持ちは遠くに離れていた。岳はこっそり体育館を抜け出した。

もう合唱の練習が始まっているのか、校舎のそこから、歌声が漏れ聞こえた。合唱の朝練をしているのは、うちのクラスだけではないらしい。晴美のことが気になって、岳の足は自然と教室に向かっていた。

少し緊張しながら校舎の階段を上がる。三階まで上がって、一息ついた。五組は一番手前の教室だから、すぐそこだ。なるべく教室から離れた廊下のすみっこをそろそろと進んで、びつくりした。教室はからっぽだった。

あれ？ みんなどこ行っただんだ？

首をかしげると同時に、廊下の一番奥の音楽室から、『ソノリティ』のピアノ伴奏が聞こえてきた。五組の練習は、音楽室でやっているらしい。

岳は音楽室のそばまでやって来た。幸いにもドアが閉まっているので、中からは見えないはずだ。耳をそばだてる。

こないだ部活の朝練が終わったあと、廊下で聞いたときは、晴美の音がすごく目立っていた。そして、ついオンチのことをばらしてしまった。

ひよっとして、あの会話がキンタに聞こえてしまっていたのか？ そうに違いない。それであいつ、あんなに怒ってたんだ……。

③ 岳はうなだれた。そして今、晴美の声が全然目立って聞こえてこないことに、さらにうなだれた。

あいつ、オンチのこと気にして、歌ってないのかも知れない。

首にかけてたスポーツタオルを、両手でグッと引つ張った。気づくと、曲が終わっていた。

「今の、とつても良かったと思います。もう一度やりましょう」

指揮者の早紀さきの声だ。

「待って。ちょっと提案があるんだけど」

今度は音心ねこころの声だ。

「五組の合唱、すごく良くなったと思うけど、どのクラスもどんぐりの背比べで、絶対に勝てるってところまでは、いつてないと思っんだ」

みんなが少しざわついた。

「だから勝つには、奇策がいる。で、提案なんだけど、最初の四小節のAメロ*って、三回繰り返しがあるよね。その二回目のAメロをソロでやったらどうかね」

「えっ、ソロ!？」

今度は一気に騒がしくなった。

「うん。正確に言うとならソロじゃなくてソリ*かな。ソプラノとアルトのふたり。たとえば伴奏はこんな感じで、すこし抑えめにして」
そう言うとなら音心は、アレンジしてさらさらとピアノを奏でた。

「おお。なんかいい感じだね」

教室がわいている。

岳は音心の即興演奏に、大きく息を吸い込んだ。きっと音心も涼方みたいな天才肌には違いない。

「なあ井川いがわ、それで誰がソリ*のやんの？」

「うん。このふたりしかないと思っっているんだ」

教室の中のちよつとした緊張が、廊下まで伝わってきた。

「水野早紀みずのと金田晴美」

反射的に岳の肩が跳ね上がった。

「えっ！」

晴美の大声が響く。それをスルーして、音心は続けた。

「早紀、ソリの間は指揮をせずに、前を向いて歌うんだ。出来るよね」

いちおう質問形だが、その言葉には有無を言わせない迫力がある。おそらく早紀は、気圧けおされてうなずいたのだろう。

「金田もOKだよ。じゃ、早速やってみよう」

ざわついた空気が、すつとおさまった。前奏がまさに始まったとき、晴美が声を上げた。

「ごめん。わたし、やっぱ無理」

音心は演奏を止めた。

「どうして」

「出来ないよ。みんなに迷惑かけちゃう」

岳の胃のあたりが、きりきり締めつけられた。

いつも自信たつぷりで、あんなに目立つのが大好きなキンタが……。頼まれたことを引き受けないネガティブなキンタなんて、今まで見たことがない。

晴美の涙顔がまたフラッシュバックした。

宝石みたいに綺麗な涙が、玉の汗の中で光っている。

握りつぶされたみたいに、胸がギュッと苦しくなった。

キンタ、やれよ。あの天才井川が、お前がいろいろ言ってるんだから、だいじょうぶだよ。

⁽⁴⁾ 祈るような気持ちになった。

「誰か他の人……」

晴美の中途半端なつぶやきに、岳は思わず前のめりになって、音楽室のドアに手をかけた。

出来るよ、キンタがやれよ！

ドアを開けてそう言いそうになったとき、誰かが言葉を放った。

「なあキンタ、まずやってみようぜ。それでダメだったら、また考えればいいじゃん」

しばしの沈黙ののち、晴美の声が続いた。

「……うん」

教室に安堵あんどのどよめきが広がった。

岳はそつとドアから手を離れた。しばらくそのまま、ぼんやりしていた。音心の前奏が始まり、合唱に入った。

涼万か……。

岳はつま先を見つめた。さっきの声は間違いなく涼万だった。涼万のひとことが、晴美を勇気づけたのだ。

——はじめはひとり孤独だった

気づくと、音心が提案したソリパートが始まっていた。岳はハツとして顔を起こした。

——ふとした出会いに希望が生まれ

新しい本当のわたし

未来へと歌は響きわたる

音心の抑えめな伴奏にのって、早紀と晴美のふたりの声が重なり合う。

早紀の透き通ったまっすぐなソプラノに、晴美の憂いのあるビブラートの効いたアルト。清らかさと切なさの相反するようなメロディーが混ざりあって、新しい音楽が生まれた。

岳は知らず知らずのうちに、腕に立った鳥肌をさすっていた。

ソリパートが終わると、ほんの少し間を置いて全員での合唱が始まった。いつもとは迫力が違った。

岳は音楽室から離れた。歌が終わってみんなが出てきたとき、こっそりそばで聴いていたことを知られなくなかった。

階段に足を落とすようにゆっくり降りた。だんだんと歌声が遠ざかっていく。やがて曲が終わったのか、大きな歓声と拍手が聞こえた。きつと、ソリパートが大成して、みんな盛り上がっているのだろう。

バスケの練習をしているわけでもなく、合唱でひとつになりつつあるクラスの一人にもなれていない。

俺、何やってんだろ。⁽⁵⁾

一階に続く踊り場で立ち止まった。どこかでずれたわずかな隙間から、冷たい空気がすうすうと体に入ってくるみたいだった。はるちゃん、待てー。

保育園のころ、小さな晴美を追いかけていたことが、脈絡もなく思い出された。

汗をかいてもいないのに、首にかけてたタオルで顔をこすった。

そのとき、上の方からバンバン音を立てながら、一段飛ばしで階段を降りてくる足音が聞こえた。足音は一気に近づいた。あ……。

目が合ったが、そらされなかった。踊り場の窓から差す朝日で、晴美の顔は輝いていた。額には玉の汗が浮かんでいる。

「音楽室の鍵、職員室に返しに行かなくちゃ」

聞いてもいないのに、晴美はそう言いながら、岳の前を通り過ぎた。

「キンタ」

咄嗟に岳は呼び止めた。晴美が驚いたように振り返る。

「えっと、その……ゴメン！」

岳はやにわに首からタオルをはぎ取ると、晴美に突き出した。

⁽⁶⁾ 晴美は一瞬固まったが、タオルを奪うようにつかむと、額の汗を雑にぬぐった。そしてまた走り出すと振り向きざまに、タオルを岳に向かって放りつけた。

「早く着替えてこないと、遅刻になるよ」

タオルをキャッチした岳は、自分のトレーニングウェアを見下ろした。あつという間に晴美の姿が消えてしまうと、ようやく部屋に足を向けた。

歩きながら、何気なくタオルを顔に当てた。

ひやつとした感触があった。

(佐藤いつ子「ソノリテイ はじまりのうた」による)

〔注〕ハッカ——ハーブの一種。メントールなどの成分が抽出できる。

Aメロ——主に楽曲の最初のメロディー部分のこと。

ソリ——複数人で同じメロディーを演奏すること。

〔問1〕⁽¹⁾ 誰もいない体育館はしんとして、バスケットシューズが立てる、キュッキュツという足音さえ、天井に立ち上っていく。

とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア バスケットシューズの音の響き方を説明することで、体育館と音楽室の広さの違いを対照的に表現している。

イ バスケットシューズの音を軽快に描くことで、痛めていた膝が完治した状態であることを間接的に表現している。

ウ バスケットシューズの音に明るさを加えることで、部活や合唱が行われている校内の様子を写実的に表現している。

エ バスケットシューズの音をきわ立たせることで、一人だけで練習している体育館の静寂を印象的に表現している。

〔問2〕⁽²⁾ 自分で自分を鼓舞する。とあるが、ここでいう「鼓舞する」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 奮い立たせる

イ 落ち着かせる

ウ 信頼する

エ 擁護する

〔問3〕⁽³⁾ 岳はうなだれた。そして今、晴美の声が全然目立って聞こえてこないことに、さらにうなだれた。とあるが、この表現から読み取れる「岳」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 晴美の様子が気掛かりで合唱練習を見に行き、自分の無神経さに気づいた上に、晴美を傷つけて萎縮させてしまっているのではないかと思ひ至り一層落ち込んでいる様子。

イ 部活の朝練を抜け出して音楽室に行ってみると、自分の陰口が晴美の耳に入っていたことを知り、晴美に嫌われてしまったのではないかとすっきり弱気になっている様子。

ウ クラスの練習の進み具合が知りたいのに、扉が閉まっっていて歌声がよく聞こえないばかりか、晴美がクラスに非協力的で周りから浮いていることに戸惑っている様子。

エ 合唱練習に参加しようと教室に来てみたが、練習場所の変更を知らされていなかったことに落胆し、クラスメイトの信頼を失った日頃の行いを深く後悔している様子。

〔問4〕⁽⁴⁾ 祈るような気持ちになった。とあるが、「祈るような気持ちになった」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 晴美が井川の提案にに応じてくれないと今度は自分が責められると考え、誰でもいいからソリを引き受けてほしいと強く思ったから。

イ 体裁を気にして本心を押し殺しなかなか歌おうとしない晴美にじれったくなり、涼方たちが後押ししてくれることを期待したから。

ウ これまでに見たことのない晴美の消極的な姿勢に責任を強く感じ、井川の言葉を信じて自信を持って歌ってほしいと切に願ったから。

エ 晴美が涙しながら歌う姿を想像すると胸が熱くなり、透き通る綺麗な歌声を一人でも多くの人に聴いてほしくて仕方がなかったから。

〔問5〕⁽⁵⁾ 俺、何やってんだろ。とあるが、この表現から読み取れる「岳」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 足の痛みで部員に迷惑をかけていることを心苦しく思うも、勝手に朝練から抜け出してしまう自分の矛盾した行動にいらだっている。

イ 仲良く遊んで楽しかった幼少期を懐かしく思い出すにつけても、晴美に嫌われる前の友情は決して取り戻せないことを悔やんでいる。

ウ 隠れて様子をうかがっていたことを知られないようにこそこそとしている自分に気づき、周囲の人との接し方が分からなくなっている。

エ バスケケットボール部にもクラスにも居場所がないように感じられ、どちらも中途半端になつてしまう自分が情けなくなっている。

〔問6〕晴美は一瞬固まったが、タオルを奪うようにつかむと、額の汗を雑にぬぐった。そしてまた走り出すと振り向きざまに、タオルを岳に向かって放りつけた。とあるが、この表現から読み取れる「晴美」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 合唱の成功で自信を得た晴美が、厚かましい岳の態度に驚きながらもわざと荒っぽく居丈高なしぐさをしてみせることで、必死に優位に立とうとしている様子。
- イ 合唱の成功で自信を得た晴美が、予想外の岳の言動に戸惑いながらも以前と変わらない態度を示すことで、照れくささを押し隠して謝罪を受け入れている様子。
- ウ 合唱の成功で自信を得た晴美が、普段と変わらない岳の姿に困惑しながらも自分の怒りがつまらないものに思えてきて、いつも通り陽気に振る舞っている様子。
- エ 合唱の成功で自信を得た晴美が、別人のような岳の行動に違和感を覚えながらもいまだ腹立たしい思いは消えず、改めて真正面から怒りを表明している様子。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

たとえば、あなたが住んでいる街にゴミ処理場を誘致する、と市長が表明したとしよう。その市長に「私が責任を持って決めたことですから」と言われてすんなり納得できるだろうか？ おそらく、「まず住民に向けて説明会を開いて、みんなで話し合ってから決めてください」と、あなたを含めた多くの住民は言うであろう。では、その話し合いはどのようにしたらよいだろうか。社会的論争のリスク・コミュニケーションに欠かせない、集団の意思決定に関して、心理学の研究成果をもとに紹介する。（第一段）

まず、一般的には、集団の意思決定の質は、個人の意思決定を平均したものよりはすぐれているが、その集団のなかで最も秀でた個人の決定には劣る場合が多いことが、実験によって明らかになっている。このように書くと、その集団（組織、社会でも同じである）で優秀な人を見つけてその人に決めてもらえば、最良の結果が得られるのではないか、と言い出す人が出てきそうである。つまり、独裁的決定である。実際リーダーシップ論などでも、優秀なリーダーにまかせておけば大丈夫、というような議論を見かけることもある。しかし、少し考えればわかることだが、そんなことは現実的に可能でない。（第二段）

(1) その理由は二つある。第一に、私たちは民主主義的な社会に生きているのだから、一人の意思決定による独裁はそもそも許されない。これに対して、首長や議員については、選挙を通じて代表者を選んでいるではないか、という反論が出てくるかもしれない。そして、そうやって選ばれた人が決めたことなのだからよいのではないかと。しかし、選挙（しかも選挙は、そのやり方を変えれば結果は変わってくる可能性がある）によって選ばれることは、選ばれた人の優秀さを保証しない。つまり、社会としては、その人が最良の意思決定をする可能性に賭けるのはリスクがありすぎる。（第三段）

また、上記の事実を明らかにしたのは実験によるものだから、「それが最良の決定か」ということがわかっている状況である。しかし、現実の社会では最良の決定が何なのかあらかじめわかっているわけではないし、そもそも「誰が最も優秀な人物か」を見いだすことは困難である。たとえば、失敗してはじめて「他の人のほうが優秀だった」とか、成功してはじめてその人が優秀であったことがわかるのである。しかも、現実場面では明らかな失敗というのは起こりにくい。（会社などでもそうだと思うが）失敗の可能性があるときには、多くの人が協働してリーダーを支えているからである。つまり、失敗は見えにくいのだ。（第四段）

さらにいえば、あらゆることに秀でている人は少ない。企業の例でいえば、創業者がいったんは成功しても、しだいに業績がふるわなくなっていくたりすることはよくある。これは時代の変化に合わせて柔軟に意思決定を変えていくようなことができなくなってしまうからであろう。（第五段）

これらのことから、私たちが知っておくべきことは次の二つである。第一は、たとえある面で優秀であったとしても、あらゆる面でつねに最も優れた人物であるとは限らないし、その人に意思決定をまかせるのは、私たちの社会の仕組みからも許されない。民主主義を前提とするリスク・コミュニケーションも、みんなで意思決定をすることを求めている。（第六段）

第二は、そのようにしてみんなで決めたことは、必ずしも最良の決定ではないということである。しかし、それは最悪でもない。一人の独裁者や専門家にまかせてしまえば、最悪の決定になる可能性をはらんでいる。最良ではないかもしれないけれども、少なくとも最悪の決定を避けるために、私たちは集団で意思決定する必要があるのである。（第七段）

社会的論争の事態では、そもそもみんなで決めることが求められているが、ここでは集団で意思決定をすることのよい面に注目しよう。（第八段）

まず、議論に参加することで、決定に対する参加者の満足感が高まる。誰か一人が決めたことよりも、みんなで話し合っただけで決めたほうが満足感が高い。したがって次に述べるように、みんなで決めたことは実際に実行される可能性が高い。（第九段）

このことを明らかにした心理学の古典的な研究を紹介しよう。これは、^{*}レヴィンが第二次世界大戦中にアメリカ合衆国で行った研究である。この研究の目的は家庭の主婦を対象としてさまざまな行動を実行させることにあった。いくつかの実験が行われているが、^{(a)II}ここでは「乳児に肝油を与える」という行動を取り上げ、講義方式によって実行させた場合と、話し合い方式で実行させた場合の実行率を比較してみよう。講義方式では、栄養士が肝油を与えることがいかに乳児の健康のためによいかを説明する。これに対して集団決定方式では、母親六人のグループで話し合いをして、挙手などによって決定した。^(第十段)

二週間後に実行率を調べたところ、自分の子どもに肝油を飲ませた母親は、講義条件では二〇パーセントであったのに対し、集団決定条件では四五パーセントであった。すなわち、集団決定条件のほうが実行率は高かったのである。この研究では四週間後にも実行率を再度調べているが、^{(b)II}講義条件では五五パーセント、集団決定条件では八五パーセントであった。両方とも実行率が上がっているけれども、やはり集団決定条件のほうが、実行率が高かったのである。^(第十一段)

まとめると、「みんなで決めたことは守られる」ということが言えよう。専門家である栄養士の話聞くよりも、自分たちで話し合ったほうが、みんなが実行するようになるということなのである。これは、社会のルール一般でもよくあることだろう。誰かが決めたルールを押しつけられてもそれに従う人は少ないが、^{(c)II}みんなで相談して決めたルールならば、それに従う人は多いのだ。^(第十二段)

⁽²⁾とはいえ、みんなで話し合っただけで決めるときには、その手続きが公正であることが重要である。ここで言う「手続き公正 (procedural justice)」とは、話し合っただけで結果にいたるまでの過程や手続きの妥当性を問題としている。特に、発言の機会があること（これを「ボイス」と言う）が重要である。手続き公正についての研究結果から、発言の機会があると、議論の参加者の公正感が高まることわかつている。つまり、リスクに関する問題についてみんなで議論することは、リスク・コミュニケーションとして重要であるというだけでなく、実際に、参加者が手続きが適正に進められていると感じることに貢献している。^(第十三段)

リスク問題に限らず、このような手続きは、私たちの社会のいろいろなところで見ることができる。たとえば、業績評価の際に上司と面談できる機会を作っている企業は少なくないだろう。これも本人に発言の機会を持たせることで、公正感を高めているのである。^(第十四段)

手続き公正の興味深い結果の一つは、発言の機会がある場合、常識的にはその意見が採用されるほうが公正感が高まりそうに思われるが、実際に意見が採用されるかどうかは公正感にあまり影響しないということである。むしろ「発言の機会がある」という

ことだけでも、結果を公正なものと感じるようになるのである。(第十五段)

このように手続き公正についての研究結果は、みんなで話し合うときに、発言の機会を与えることがいかに重要かを示している。まとめると、みんなで話し合うことは、決定に対する実行率、公正感を高めるのである。(第十六段)

⁽³⁾ただし、前述した手続き公正の研究結果から明らかとなった、意見が採用されるかどうかはさほど公正感に影響しないという点^(d)は、この手法が悪用される可能性を示唆していることにも注意しておきたい。行政の説明会や公聴会^(d)の類でよくあることだが、住民や関係者を集めて発言の機会だけを与え、「ご意見は承りました」というように、発言や話し合いの結果を施策の変更や改善にまったく使わないような場合がある。この場合でも、参加者の公正感あまり変わらないので、意見を聞いてもらっただけで満足してしまう可能性がある。(第十七段)

企業や行政機関のウェブサイトにある「ご意見欄」(意見を投稿するところ)や「パブリック・コメント」でも、同じ問題が起る可能性がある。つまり「意見を聞いておくだけ」で、なんら変更されることがない可能性があるのである。(第十八段)

リスク・コミュニケーションでは、問題(たとえば、迷惑施設の建設、ダム建設、環境問題の生じる可能性など)を認知した当初から、住民をはじめとする利害関係者(たとえば環境NGOやその問題の専門家など、地域外のメンバーもここに含まれる)の意見を聞く話し合いの場を持つことが求められている。しかし、日本の場合、ある程度方針が決定してから(おそらく、そのときにはすでに大半が変更不可能な状況になっている)説明会や公聴会が開かれることが多い。本先に説明しているだけで、そもそも住民の意見を聞くつもりはないと思われるようなものもある。また、当該地域の住民以外の参加を認めないような例もある。リスクに関する利害関係者はたくさんいるにもかかわらず、である。そういうものは、そもそもリスク・コミュニケーションになっていないのである。(第十九段)

また、これも心理学の研究で明らかになっているが、公聴会のような場面で注意したいのは、相手との権力の格差が大きいほど、相手に同調する可能性が高いということである。権力の格差とは、たとえば企業の場合言えば、平社員が社長に自分の意見を聞いてもらう機会があったとして、実際の場では社長の意見に同調しがちになってしまうようなものだと言えるだろう。公聴会の場合には、仮にそこに議員や地元の有力者などがいるとすれば、そのことよって発言者は有力者の意見に同調しがちになってしまうのである。参加する立場としては、そういうことがありうると知っておいたうえで、自分の態度を振り返る必要があるだろう。(第二十段)

(吉川肇子「リスクを考える」(一部改変)による)

〔注〕 リスク・コミュニケーション——望ましくない事態が起こる可能性について議論すること。

レヴィン——アメリカの心理学者。

肝油——サメやタラなどの肝臓から抽出された脂肪分で、ビタミンA・Dが多く含まれ、栄養補給に用いられる。

公聴会——公的機関が重要な案件について利害関係者や学識経験者などから意見を聴取する会。

パブリック・コメント——国の行政機関が政令や省令などを定める際に、事前に広く一般から意見を募ること。

〔問1〕 その理由は二つある。とあるが、「その」が指し示す内容を本文中の語句を用いて、「理由」に続くように三十字以上

三十五字以内でまとめて答えなさい。

〔問2〕 この文章の構成における第八段の役割を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた内容を受けてさらに話題を掘り下げ、論の展開を図っている。

イ それまでに述べてきた内容とは反対の視点を新たに提示して、主題を転換している。

ウ それまでに述べてきた内容について要点を整理した上で、論旨を確認している。

エ それまでに述べてきた内容の主旨を検討し直すことで、論点を明確にしている。

〔問3〕 本文中の〓〓〓を付けた(a)～(d)の「が」のうち、他の三つと意味・用法が異なるのはどれか。

ア (a)

イ (b)

ウ (c)

エ (d)

〔問4〕⁽²⁾ とはいえ、みんなで話し合って決めるときには、その手続きが公正であることが重要である。とあるが、筆者が「その手続きが公正であることが重要である」と述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 話し合いの手続きが公正な時には部下が上司に直接交渉することで、部下は自分の業績を強くアピールできるため、よりよい評価を得られるようになるから。

イ 話し合いの手続きが公正ならば人々が積極的に参加し、話し合うことに満足するので、集団の意思決定に関する心理学の研究成果が証明されることになるから。

ウ 話し合いの手続きが公正であると手続きの過程に時間を費やし、多くの人々の関心が集まって、リスク・コミュニケーションの認知度がいつそう高まるから。

エ 話し合いの手続きが公正で発言の機会が与えられると、参加者は話し合いが適正に行われていると感じることができ、決定事項に対する実行率も高くなるから。

〔問5〕⁽³⁾ ただし、前述した手続き公正の研究結果から明らかとなった、意見が採用されるかどうかはさほど公正感に影響しないという点は、この手法が悪用される可能性を示唆していることにも注意しておきたい。とあるが、ここでいう「この手法が悪用される可能性」とはどういうことか、次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 説明会や公聴会に参加する人々が発言の場を効果的に活用して施策の問題点や欠陥を追及し、自分たちの権利の拡大や利益の誘導を推し進める可能性。

イ 説明会や公聴会を主催する側が参加者に発言の機会を与えることで公正さを担保しながら、実はそもそも施策の変更や改善を行うつもりがない可能性。

ウ 説明会や公聴会の開催にあたり権威ある地元の有識者などの出席を促し、施策の推進者が反対者の発言に圧力をかけるための場として利用する可能性。

エ 説明会や公聴会で発言が活発であると適正な手続きが遂行されているようにみえるが、主催者側にとって都合のよい関係者が多数出席している可能性。

〔問6〕 本文で述べられていることと合っているのは、次のうちではどれか。

ア 企業を成長させるには優れた才能をもった創業者の意思決定が決して揺るがないことと、その決定を集団決定としてそのまま受け入れ、多くの人が協働して実行していくことが必須である。

イ 集団的決定条件に関する心理学の研究成果は数多く発表されているが、それらは第二次世界大戦中の研究が中心であり、現在の社会のルールには当てはまらないケースがしばしば見られる。

ウ 公の場で広く利害関係者や学識経験者から出された意見を聞くだけではなく、その意見を施策に反映させることがなければ、適切なリスク・コミュニケーションになつていないとは言えない。

エ 民主主義を前提とする現代の私たちの社会では、すでに集団の意思決定が社会の仕組みとして機能しており、これまでも多くの人々の話し合いによる最良の決定が十分に行われてきている。